

季刊

地球生活マガジン*住まいは、生き方

チルチンびと

11

号

2000
WINTER

★特集

やつぱり、
木の家。

実例・木が生きる家。

古材の「力」に触れる。

樹から木へ。

★特集

木の家具を

オーダーする。

★特別企画

蘇る素材―畳・瓦



写真/佐伯マギー

私が日本に来たのは22歳の頃です。最初の6年間は東京に住んでいましたが、28歳のときに結婚して、夫の弘が借りていた京都美山町の茅葺き農家に一緒に住むようになりました。築100年は経っているこの民家を数年後に買いとった私たちは、いたるところから材料を調達しては、近所に住む大工の後藤章さんの手を借りて、改修しながら住み続けてきました。

私は10年前に川崎の日本家園を訪れて以



長い梯子の上で、葺を次々と留め付けていくロジャーさん。

来、すっかり茅葺きに魅せられてしまいました。昨年私たち夫婦は、美山町の3人の若い茅葺き職人とともに今日の日本の社会の中で茅葺き民家がどうあるべきかを考えようと、美山茅葺き研究会を発足させました。その最初のプロジェクトとなったのが私の家。以前私はイギリスの茅葺きを習うため渡英する茅葺き職人に英語を教えたことがあり、そのときに聞いた話がきっかけとなって、ついに今年の9月、イギリスの手法でうちの屋根を葺

イギリスの茅葺き職人が京都・美山にやってきた。

アメリカから日本に来て14年というフリーライターの佐伯マギーさんは、京都府美山町の茅葺き民家に住んでいます。今回、屋根の葺き替えが必要になったのを機に、マギーさんはイギリスの茅葺き職人を日本に招くという大胆なプロジェクトを思いつきました。日本の茅葺きの将来を真剣に考えるマギーさんの挑戦は、失われつつあるものへの新たな可能性になるかもしれません。





屋根には埃よけと雨よけのために青いシートをかぶせる。



右ページ/作業に入る前の茅葺き屋根。右/降ろした古い茅を積み上げるのに忙しいマギーさんとロジャーさんの夫人のアイリーンさん。上/古い茅は束にし屋根から降ろす。



現代の茅葺きに期待する

美山町は、日本のほかのどの場所よりも若い茅葺き職人にとってチャンスのある土地でしょう。現在、美山町には4人の若い茅葺き職人がいます。そのうち3人が研究会のメンバー。そのうちの一人、美山町で生まれ育った31歳の中野誠さんは昨年職人として独立しましたが、彼が勤めていた農協をやめ、山崎辰之助さんと山内秀一さんという二人の親方に弟子入りした7年前には、これから茅葺き技術を体得しようとする人はほかに誰もいませんでした。しかし、60代前半の二人の親方

き替えるという、国際文化交流ともいえるプロジェクトが始まったわけです。
民家というものは、人間関係や、経済的な問題、地域的なしがらみなど、さまざまな事柄に深く関わっています。我が家も例外ではありません。しかし、私たちの場合の「地域」はもっとグローバルです。農家や林業家の人たちと同じようなことはできないかわりに、記事を書いたりネットワークを広げたりすることで、まったく異なる情報を得て新しいアイデアを生み出すことができます。元来、民家は周囲からあらゆるものを手に入れる、そのチャンスによって左右されるもの。私たちはネットワークを駆使して、解体される木造校舎など、さまざまなところから床板や建具をもらいました。

また、大工の後藤さんは独自の発想で、脱衣所の天井に古い簾戸をはめ込んでくれました。脱衣所の屋根は透明の波板のしころ屋根。簾戸のお陰で湯気は天井の上の通気孔に吐き出され、波板に降り注ぐ日光も下まで射し込むようになったのです。家主の希望と大工の工夫、材料の特徴などが一体となって、納得のいくものをつくりあげていくことは一種の醍醐味ともいえます。

のほうもまた、技術を伝えたいという思いにかられていたといえます。

もう一人、40歳の尾坂勝さんは神戸生まれのフリーランスの職人です。93年に茅葺きを始める前までは、大阪のデパートの子会社で経理を担当するサラリーマンでした。そして最後に、27歳の塩澤実さん。神戸芸術工科大学の環境デザイン科を卒業し、すぐに茅葺きを習い始めたという人です。今回のプロジェクトで、尾坂さんはフルタイムでイギリス人の職人、ロジャー・エバンスさん(52歳)のパートナーをやってくれました。ロジャーさんは32年のキャリアを持つ経験豊富な親方。CountrySide Agency's hatching schoolという学校のインストラクターをやっていて、3種類の茅葺き用の草を扱えるという資格を持っています。

私が最初にロジャー・エバンスさんにコンタクトを取ったのは98年の2月。翌月にはロジャーさんから大体の見積もりが届き、「とにかくやってみよう」との快い返事ももらいました。その後、日本から葺のサンプルを送ったり、ロジャーさんからも質問や相談をもらったりのやりとりを何度も繰り返し、また一方で、資金繰りのためにいくつかの基金に援助を申し込んだりしながら準備を進めていきました。6月には下見をしてもうらうためにロジャーさんを美山町に招き、あらゆる下準備に奔走したのち、ようやく今年の9月、ロジャー



美山の「かやぶきの里」。この辺りは茅葺きの保存地区で、美しい集落がいまも残されている。



古い茅がすっかり取り払われ、下地だけになった屋根。



右ページ/マギーさんのご主人、弘さんも仕事の合間をぬって作業に参加。上/新しい葺の山から束を降ろす。左/屋根の上のロジャーさんと尾坂さんに相談をするマギーさん。

* 茅葺き(かやぶき) 屋根とは、葺、藁、茅、チガヤ、ススキなど)のような細長い植物で葺かれた屋根を総称している。



上3点左から／古い茅を取り去った屋根の下地を中から見上げたところ。／後藤さん（右端）が中心となって窓枠を屋根に取り付ける。／窓枠取り付けの準備をする後藤さんと尾坂さん。右写真／取り付けられた窓枠に、葺を葺くための下地をつくるロジャーさん。

1さんは奥さんのアイリーンさんと一緒に関西空港に降り立ったというわけです。

合理的でシンプルなイギリスの工法

今回のプロジェクトは、イギリスのやり方で日本の屋根を葺くというとても単純な技術合体です。われわれ夫婦はロジャーさんと尾坂さんに、宮城県北上川産の葭（これはイギリスの葭にいちばん近いもので）を材料に、スチールのおしぼこ（茅などを押さえるために横に渡す細い棒・押さえ竹）とフックを用いるイギリスの方法で作業してもらいたいとお願ひしました。素人だからこそ、私たちは大胆な発想ができるのかもしれない。日本の茅葺きはとても手間がかかるため、どんどん失われ、違う屋根に変わってしまったというのが現状です。研究会の中でも、このプロジェクトの評価はまちまちですが、この試みが、茅葺きを残していくためいろいろな方法を見つける、その最初のステップになればいいのです。そういう思いから、私たちはプロジェクトの初期の頃から日本中の茅葺き職人に、イギリスのやり方を見にこないかと声をかけました。

美山町で行なわれている通常の茅葺きは、縄や針金を用いて、茅を押さえる竹を下地の垂木に縛りつけて茅を固定していくものです。普通、屋根の内側に一人、外側に一人いて、大きな針をやり取りしながら茅を縫い付けていくようにするので、作業には二人必要になります。ところが、イギリス式のやり方では、スチールのおしぼこで茅を固定する作業を、屋根の上に乗った人が一人ですべてやっています。垂木にフックを打ち付けながら、屋根の上を移動していくわけです。昔は草で作った縄、その後タールのついた縄で縛っていたのですが、それからさらに合理的に発展してこの手法が生まれました。このスチール



を使う新しい茅葺き法は、約100年前から行なわれるようになったそうです。フックがどのくらいしっかりと葭を固定できるのかが気になってロジャーさんに質問してみたところ、彼の答えは「ハンマーで打ち付けたもの以上に強く縛りつけられる奴なんてどこにもいないよ」とのことでした。

イギリス式のとてシンプルな手法は、人件費が安くあがる点で、私たちにはとても魅力的でした。日本の職人さんうちの葺き替えを見積もってもらったところ、その価格は1100万円。イギリスの普通の家を葺き替える場合の値段は1万8000ポンドから2万ポンド（360万円から400万円）といわれています。このプロジェクトは実験なので完全な価格の比較はできませんが、最も割合を占める人件費が少なくすむのは確実です。この記事が印刷されるころには、まだ屋根は完成していませんが、それでも、私たちは最終的な経費が日本の茅葺き方法でや



右／いよいよロジャーさんが葺の取り付けを始めた。下から手渡ししているのはマギーさん。上／ロジャーさんのゴム製の膝当て。左／膝で体を支えながら作業するロジャーさん。





右/並べた葦にスチールのフックを打ち付けていく。上/フックにスチールの押さえ棒をはさみ、葦をしっかりと固定。左/梯子の上で体を斜めにしながらの作業が続けられる。



るよりも安く上がると期待しています。

現代の住まいは光でつくる

古くは、イギリスの茅葺きの家は、住まいと納屋を兼ねているものでした。屋根は藁でつくられ、リビングの上部のロフトに鶏を飼うスペースや、囲炉裏のようなオーブンになった火を焚く場所があり、屋根には煙出しがついていました。しかし、現在のイギリスの茅葺きの家は、ほとんどが2階建てや3階建てになっていて、窓がたくさんあります。葦の屋根には窓が開けられ、屋根からレンガの煙突が突き出ていたりします。煙突と、きちんとつくられた天井と、複数の階、そしてたくさん窓の窓。古いものを現代の生活に合わせて変化させ、快適にしているわけです。

一方で、日本の茅葺き民家は戦後の急激な生活様式の変化に充分対応できていません。10月の2日と3日、25名の茅葺き職人と数名の学識経験者を招いてワークショップを開催することができました。その中で参加者の一人、武山貞範さんは「昔の家は、はっきり言うとうつらうつらです。だからといって、屋根だけ茅葺きで、屋根の下の生活部分は自分の住みやすいように変えるという発想はあまりない。それを買ったらそのまま住まなきゃならないというような、変な感覚があるんです」と言っていました。

部屋数が10もあり、何年にも渡って自分で手直しをしたという築300年の茅葺きの家に住んでいるロジャーさんは、

「保存団体などの人たちと住まい手はお互いに歩み寄りをするのが秘訣。屋根だけ残せたら、それでほとんど十分だと思えます。保存団体の人たちもこの現代に生きてるわけだから、私たちが寒くて暗い古い家に住みたいかないということを理解しなくては。保存団体も住まい手も考え方をそういうふうに変えて

いかなくはないけない」と語りました。

ライターという仕事柄、私は多くの時間を家の中で過ごしています。私たちの家は冬はとても暗く、2月には1メートルもの雪に覆われます。私はしばしば寒さに震え、気分さえも落ち込んでしまいます。

「茅葺き屋根に窓を開ける場合、イギリスの工法は日本のやり方よりもずっと優れている」と、尾坂さんはいいます。

「なぜなら、イギリスの方法は単純に屋根のラインに沿って茅を取り付けていくので窓枠の上の垂木にもきれいに並べることができ、窓をつくるとそのぶんコーナリーの部分が多くなります。これを日本の工法でやろうとすると複雑な作業が必要になってしまいます。もし、日本の職人に屋根に窓をつくりたいなんて言ったら、それは経験もないし、普通には考えられない注文だから絶対良い顔をされないはずですよ。」

ものすごい厚みの日本の屋根

ロジャーさんがうちの屋根を初めて見たとき、彼はすぐ葺き替えが必要なのを悟ったそうです。それは、押さえ竹(おしほこ)があちこち壊れて飛び出していたから。いろいろな部分が弱り、茅の重さだけでかろうじて屋根がそこにとどまっているという状態だったのです。もし、次に雪が積もって溶けたら、その部分の屋根が落ちて穴が開くことは必至。ところが、屋根をはぎ取ったとき、ロジャーさんは押さえ竹の下にもなお、茅、藁、草などの材料がすごい厚みの層になっているのを見て驚いていました。イギリスの屋根は、材料を30cmの厚みで取り付けます。その厚みの2分の1のところをスチールの押さえ棒で留めていくので、押さえ棒は15cmの深さのところになるわけです。もし、年月を重ね押さえ棒が見えてきたならば、その屋根は修理か葺

はみ出したり落ちてきた葦は決して切らない。平たいシャベルのような専用の道具で押して、きれいに揃えられていく。





半分ほど新しい葺かされた屋根。



右/新しく葺かれた軒先を下から見上げる。きれいに揃えられた葺が青々しい。上/黙々と作業するロジャーさん。屋根の高い位置で梯子を動かしながらすすめていく。左/日本の職人もイギリスの茅葺き法に挑戦。

き替えが必要だとわかるのです。
では、なぜ日本の茅葺き屋根の押さえ竹の下にはそんなにたくさんさんの材料が置かれてい
るのでしょう？

筑波大学の教授で茅葺き屋根の研究をして
いる安藤邦廣氏は次のように述べています。

「それほどたくさんさんの材料を使うのは農業の
サイクルと関係している。つまり、古くなっ
た草、茅、藁などは次に肥料として使われる
という役目がある。『結い』のシステムで手伝
いしてきた近所の人たちは、屋根葺きが終わっ
たら古い茅などを肥料にするため、手伝いの
お礼としても帰る」。

しかし、現在の日本の農業ではもう肥料に
古い茅や藁は使われません。いまでは屋根に
葺く茅や藁自体がなかなか手に入らないとい
うのに、なぜいまだに日本では同じ方法で屋
根葺きが行われているのでしょうか？

まず下地の調整が必要

うちのよう茅葺き屋根とイギリスの屋根
とではまったく異なったつくりになっていま
す。日本の農家の茅葺きは、ほかの家で不要
になった垂木をもらって再利用することも多
く、また、年月を経たものは壊れたところを
修理した部分が継ぎ接ぎのようになっていた
りもします。しかし、イギリスの場合はどん
な家の屋根でも、とても整然と均一につくら
れているそうです。

ロジャーさんは、「イギリスではずっと昔か
ら茅葺きの田舎家を建てるとき大工は四角く
まっすぐにつくってきた。もちろん屋根のつ
くりもね」と、うちの屋根のつくりが信じら
れないといった様子。

「イギリスでは屋根をつくることは大工の責
任。日本では茅葺き職人です。それもでき上
がりの違いに関係しているのではないかと
尾坂さんは言います。不要になったものや古

い材を再利用することは、それはそれで意義
があると思うのですが、今回のように、まっ
たく異なるイギリスの手法で葺き替えるとな
ると思わぬ問題も出てきます。

うちの屋根の垂木や押さえ竹はサイズも並
び方もまちまちなので、イギリス式のフック
を使うのはほとんど不可能。細い垂木は押さ
え竹のずつと下の方にあるような状態で、用
意していたフックは垂木にちよつと触れるだ
け。フックは垂木に垂直に1インチ(2・5
4cm)は刺さらなければいけないから、もつ
と長いものでなければ使えないものになりませ
ん。だから、私たちはロジャーさんが屋根をまっ
すぐにつくっていきけるように、最低限下地の
部分を揃える必要があります。そんなわけで、
大工の後藤さんはずつと屋根の上にいる羽目
になってしまいました。

材料は絶対に切つてはいけな

私たちのプロジェクトで一番、通常と違う
点は材料かもしれませぬ。美山町では、ほか
の材料を使わずに葺だけで屋根を葺いている
のはうちとちよつと軒だけ。私たちが茅ではな
く藁を選んだのは無駄をなくするためです。ば
らつきのある茅よりも、藁の方が施工の時間
がずつと短く、しかも保ちもいいのです(茅
は25年、藁は50年)。イギリスでは、藁を2層
に重ね、一番外側だけに藁が見えるようにつ
くられるそうです。

イギリスの場合、屋根の厚みを30cmに揃え
るため、短い藁(6フィート約182cm)
以下が適しています。そして、藁は決して切
り揃えないで使います。美山では茅を使うた
め必ず切り揃えられますが、ロジャーさんに
よると、切つてしまうと長持ちしないそうで
す。「1インチ切るごとに、屋根の寿命は10年
短くなる」。

体験作業に参加してくれた職人の山田雅史



マギーさんの

現場日記

●9月13日。ロジャーさん、尾坂さ
ん、後藤さん、そして私と夫で窓に
ついての相談。ロジャーさんは、窓
の位置は高いほうがいいという。な
ぜなら、窓下の茅を葺く部分が短い
と作業が難しくなるから。私の希望
は、いま家で一番暗い部分になって
いる台所横の天井に、明かり取りの
窓ができること。

●9月18日。葺き替えが始まって4
日目。一番最初に取り掛かった南側
の軒はもうほとんど終わっている。
竹が支えている北東の角は少しの重
さがかかっただけで壊れてしまっ
た。後藤さんはそこに木の支柱を入
れてくれた。それで、ずいぶんしっ
かりしたように見える。

●9月27日。後藤さんに手伝つても
らって東側の破風の古い部分を新し
いものに切り替える。古い木や小さ
な木を新しい木に替え、日本の伝統
的なやり方ではなく釘で可能なかぎ
り打ち付けていく。

●10月1日。窓がつくられその周りに
藁が葺かれて3週間が経った。と
ころが、後藤さんがリビングの古い
ベニヤの天井をはがしたところ、梁
に邪魔されてほとんど窓からの光が
遮られている。光を入れるには、天



右/葺が簀かれ、かわいらしく仕上がった屋根の小窓。上/小窓の回りに葺が簀かれると、外観の印象もずいぶん変わってきた。日本の茅葺き民家より、軽快なイメージ。



さんは、こう言っていました。

「確かに端物だらけだね、日本の茅は。それに、材料を持ってきてそのまま使う人もいれば、同じ長さにピタッと切ってから使う人もいるし。そして、できあがったらまた鉄を入れて切り揃える」。

柔軟な考え方への転換を

文化的・歴史的にみると、日本の従来のやり方を変えたり、材料をこれまでと違うところから調達したりするべきなのだろうか、という疑問も出てきました。

それに対してロジャーさんは、こういいました。

「私たち職人は、生き残るためにどこへでも行くし、やるべきことはなんだってする。だけれだってお金を得るためにはどんなことでもしていきましょう」。

イギリスでは、葺は通常ヨーロッパ大陸から輸入し、藁の場合ははるか遠くから取り寄せることもあります。人はみな、生きるために、お金を得るためにさまざまな努力をしているもの。ましてそれが、消えゆく文化を残すことにつながるなら、多少考え方を柔軟にする必要があっても当然かもしれません。

イングリッシュ・ヘリテイジから出版された茅葺きの建物についての『ガイダンスノート』には、日本の問題についても書かれています。日本がいま考えるべきことは、どうや



ロジャーさん愛用の道具たち。下の四角いコテのようなものが、前ページでも紹介した葺の端を揃えるための道具。

って茅葺きの家を、昔の生活を見せるための博物館としてでなく使用できる住宅として保存していくかである」。

武山さんはこう指摘します。

「お施主さんにしてみれば、施工が安くて速くてきれい、というのが一番いい。どこの家に行ってもみんなそうです。茅葺きはその希望を満たせないから、守っていくのはすごく難しいんです」。

ロジャーさんからのアドバイスは、職人は、茅葺きの産業をこれからどういうふうにしていきたいかを真剣に考えるべき、ということ。施主や国もまた、茅葺きは残すべきものかどうかについて責任をもって考えることが必要だと思えます。

私たちのプロジェクトが試みたイギリス式の茅葺きが、果たして日本の風土の中でまったく問題なく使えるのか。それはすぐには答えのないことです。でも、これは誰もやっていない初めての試みだし、何事もやってみないと始まらない。とにかく、私たちは日本の茅葺きの将来に、少なくとも一つの可能性を提示できたのではないかと思うのです。

屋根の完成まであとわずか。多くの人が参加し、マスコミや研究者、職人などを各方面の注目を集めた斬新なこのプロジェクトの結末は、次号（3月5日発売・12号）にてご報告します。巻末のスクランブルに掲載する予定です。どうぞお楽しみに。

井をもっと高くしなければいけない。

それには2階の床の3分の1を切り取らなければならないことになった。

●10月2日。朝早く。私たちの天窓から明るい光が差し込んできた！

●10月4日。降り注ぐ光で思いついて、暗い感じの戸棚は捨て、天窓の下の壁にも新しく窓をつくりそこにベンチを据えることにした。部屋の感じはすっかり変わった！

●10月13日。尾坂さんはチェーンソーを使って南西の外側の3番目の垂木をひとり直している。後藤さんは、リビング上部の天窓の下の葺を、煤竹天井を使ってきれいに隠す方法を考えている。それぞれのメンバーは、自分の道具を使いながら、得意な分野でやれることを実践してくれている。



上/同じ道具を使いながら、葺き終わった屋根の仕上げをする。左/作業がすすみ、美しく仕上がっていく屋根。

